

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4

慶長
以來
新刀辨疑

六之下



新刀辨疑卷六下索引

十一丁	國義	國廣	吉道	埋忠之矢根		
十丁	國貞	良忠	真改	國光	吉光	
九丁	安在	元直	良時	實澄	元安	助廣 <small>刀小</small>
八丁	弘幸	廣助	義長	一英	武永	安國
七丁	蕪光	國廣	包保	助宗	行廣	正廣
六丁	清綱	震作	大陸奧	彦作	慶榮	宗永
五丁	國平	永重	永朝	明久		
四丁	國輝 <small>州豫</small>	國豐	貞幸	安當		
三丁	清一	廣隆	鷹謀	吉永	長義	國輝 <small>州豫</small>
二丁	正清	寶榮	冬貫	蕪房	秋房	安貞
一丁	明壽	同彫物	稻荷住	國輝	國助	兩作
						蕪道



6208



十二丁	埋忠之矢根	義國	國安	久道久次兩作
十三丁	忠國 <small>代三</small> 兼先			
十四丁	兼次 兼先 <small>工三</small> 壽格			
十五丁	重行 <small>形山</small> 長信	高廣	卜傳	
十六丁	鷲 安次	安英安貞兩作	光正	國佐
十七丁	友道 久國	輝廣	清重	國宗 忠金
十八丁	祐定 <small>作三</small> 清重	國平 <small>坂大</small> 國重	盛國	國平 <small>州薩</small> 重信
十九丁	包國 昌常	國包	廣隆 <small>鎗</small> 安倫	虎徹 長旨
廿丁	忠綱彫物	助廣 <small>角</small>	助廣真改兩作	
廿一丁	兩作之記			

索引終

新刀辨疑卷之六下

山城國西陣住人埋忠明壽
 ○慶長三年二月日

辨持○埋忠及八郎重代



世不埋忠明壽作彫物子長吉漸と絡せしを又今不埋忠長吉は
 重代とせしを案とるよき長吉漸と絡せしを又今不埋忠長吉は
 久道久次又八郎重代の子に疑ふし長吉漸と絡せしを又今不埋忠長吉は

「はこマテ小肉アリ未ハ角ム子

○濃羽古鬮無別五休傳
○山城國伏見稻荷住

「ウラ 慶長五年二月日

此工の名入るふふ一関龜文小毛大辨の作也

○伊勢守國麴又子

國助ハ四代目あり

○河内守國助兩作

「角ム子

○丹後守無道

「無道初代の異銘也

上ケ残り二尺九寸六分

「中丸ム子

○山清

地狭強く重なる龜
文出羽守助重に似
たる大坂濃羽ありん

「角ム子

○扇住藤原寶榮作

「無道ありの如し

「ウラ 寛永十九年二月吉日

○豊後 三佐住藤原冬貫

「ウラ 安永七年二月十日

冬貫ハ豊後國中川の鑑治今の人也地狭強く重なる龜文出羽守助重に似たる大坂濃羽ありん

東都注常陸守藤原兼房

ウラ 安永公卿初春子兼平作之

江戸每國邊の位安永公卿平十公華國臣位の御也

秋房

々形路の形弘誓

秋房ハ上野國厩橋酒井家の源治源理山源五子

松齊安貞

ウラ 貞上鍛作之

江戸麻布子住すえ下原武光太郎の一人源五郎と云上子ありあは

小肉

大九公子

九公子

九公子

切助住清一

唐切清一

寛永の源五郎と云上子

蕪子住廣隆造之

ウラ 安永八年二月

唐際ハ数代連絡す々の唐際ハ上子ありあは國臣源五郎同位兼之

小肉アリ

揚列住黒田鷹雄

大鳥文

刃長一尺八寸一分

揚列住黒田鷹雄法安永中造之刃長一尺八寸一分

初代忠吉父子五左衛門吉長永も切一掃する上もや初代忠吉出来

肥前國佐賀住吉永

角子

陸奥會津住長義

上子や忠吉かこの如く切一掃する上もや初代忠吉出来

小泉又ふして
長通う出来の如し

豫○初來山住三好藤四郎事

和○大榎藤原國輝作

藤四郎國輝ハ二代目よりして享保中の人也其後細小能自いあり
上子也國と切一掃初代輝故々老後の銘國と切一掃二代目名也

角子

豫○初來山住藤原國輝

○明和九年壬辰八月吉日

先祖三好六五郎門清長寛永中孫お初山堪主孫お侯の家報名と兼
其子孫四郎合長寛文中和泉大榎藤原國輝と名取す三代目ハ孫
州大坂小林伊勢守國輝門人陸奥守榎輝政と和泉大榎國輝と名
子として元禄中孫あつた白江おち和泉大榎國輝と改む四代目お
初山國輝幼少して父小泉守永中太坂に往伊勢守國輝お從
て歸りて五代目亦忠吉子として孫お初山國輝と名取ふる父小泉
忠吉孫お初山の内を孫お初山と名取ふる後孫お初山を孫とする
所すふる忠吉も也其後孫お初山と名取ふる上子也六代目ハ三好忠吉
の長次と云作父お初山

河内守國豐

按する小國豐ハ
中河内社來の

銘ありし一城狭くして強くまゝを處て自以津一中心の仕立懸る事記

角公子

河内守深來貞華

ある事あるを海より大坂津迄とて長華小似て傍に

さる事あり

救平安當

此治工多集一書并小國人の書も漏りり然るに其作お常お廣
き不能似て薩州銘記ある事ありの色あはるに安當かく切しりや

薩摩國住國平

國平の作後集小又しりりとしり此中心の出流仍る今交り國す

小肉丸

小肉アリ

根津守藤原永重



奥列仙墓住和田半之助房長依貴僧修三七日護摩命
永重造○之附與○從五位下藤山氏兼丹後守藤原
貞政即落二胴常帶焉 貳ハ胴

永重ハ奥州仙臺の以工やあはる集に足らず地狭細小松目津ハ
小つ小流多し津一は仙臺中つ物代國包あはる記物足るを傍に

九〇子

永朝

羽山形の城を新元彦の作也地味細小ゆ縁あり器もくを以て
足る能出するあり西より之を君よりして刀劍を造るは好まら
大九〇子

○寶曆十四甲申年三月閏日氏為源晴久造

九〇子
○蓋藏元吉英真十五枚申伏造之

古器を多原國より也地味細小少く器好くは焼くたは器後
松新あふり作又同一疑くは九〇子あり

角〇子

山城國住藤原清經

清經ハ國侍り出来は趣もて位劣なり寛文比と云へり

九〇子

○震作之

寛文九年八月日

刃一尺七寸五分 鍔元式寸 條線理走らる上は條あり又
先三四寸 條線 地味強し 内一震の言をあるん
細宗御后の隠居

甲割
於信列松本以君命鍛
團代子
殘一折故慎除銘所持

角〇子

右陸奥守信州松本小切力と云へり

三宅作

ウラ二月日

地味素く小流多し一廣經理末の子代齋の如く芝長の比と
丸ム子 八んたき

慶榮

慶榮ハ寛永此の流治と見へし一廣經理守
カクム子 小毛似し上

根良住藤原宗永

宗永ハ大坂の住角野書より見ゆる一
海より經理初代たけふ並ぶべき上り

小ニク

越後住無光

ウラ文禄二年二月日

地味強く細經理関の奈良太郎兼常小似し上りと云べし
丸ム子 三書に道漏す

自信濃丹波目國廣

予見る所の物ハ結身よ位の甲乙辨すべし一
同國廣の末葉べし一書の大坂の國廣あるも知るべし
小肉 評を待耳

濃列住包保

陸奥守と別人あるべし一
一家の住小似し稱と
べし

○加任助宗
ワラ 廢○安貞年初冬自

後集子云助宗ハ津田助廣ノ門人ありと今此記慶安の事
号河多氏以て名好を初代助廣の門人某べしと書封に
して甚く惡同封也也流ひしあらん某又二代をてれ書
と云し者の父あるも知づるべし猶もたるもの也某安二より
延寶元まを二十三年と

肥前國行廣

あ工古に今世人ふく位も今の右吉忠廣に同

肥前國正廣

小肉

平安城藤原弘幸

又長二尺三寸一分

角ム子キリヤスリ

弘幸ハ後集子云如し堀川住居切る中心某と出さる所某に

河上



島田小十郎廣助於信列

九子 サシ表 負享二年二月六日

島田小十郎助宗と同人あるべし津田助廣寛文中の化
をアんとぬき大壺又を猶もする上と

小肉アリ

於榎刀羽平安城源義長

大榎源の丁子島又大板出羽を助信位の治ととん
たも寛文延寶の比あるん

筑前國住入英造

同國吉國ホの一
新集べし其出来
位在不終似たり
延寧宮と和比こ

武永

武永ハ高集一書不見へ
む地鉄細は極目無い
加多鉄子の治工あらん
上子ちのり

出月大保藤原國路

元和八年二月吉日

此國路ハ初代の治手号を以て記
す

戸川達富使武藏太郎安因
於武及麻布真丸鍛作之

ウラ室永七庚寅年八月吉日

小龜又又
稀とびき
にあらず

薩列任一平藤原安在

ウラ 應藤原義正之雷而作之

安在ハ寛平以来の治治し正良元平亦同佐のゆのこ

薩州住元直

ウラ 安永四乙未八月日

元直ハ奥小左衛門と号し和泉守忠重の孫とて元直の子と
元平元武元安三人の父とく佐父子同列と

隅州住良時

良時ハ薩州守良門人あらん

其出来より似たり明和安永此の人と云ふ

薩列任 寶 澄

刃長二尺一寸二分

柘目肌廣スクホツシ系純後
正良元年元武亦同位也

安永七年二月日

薩陽士元安

ウラ 安永八年八月日

元直々の男也元年元武の才也同位也

越前 守 助廣

中肉

和泉守藤原國貞

元禄九年八月吉日

世不其改の銘不出来あるを國者國の銘せしむるは
改國者國の銘改と号す然れども是は銘のたぐひは
其改子乃そとるなり 應改すべし 強はるる
不あり 國者國の銘改の銘すの事

肉ヲキ其改ニ因

其上良忠

安永七年八月日

或云良忠の出来改く源男ふして國者國の銘すの事ありと
あるべし其出来其改のわし弱きも銘すあ不國
志はれども今此銘にふつて重てなり 出也

和泉守真改

按するに寛文十二年終るの儀あらん

小肉

ハシウラ
ハキ元



揚州住吉光

角字

吳ある中の故重光 友小出の代

揚州住吉光

中河内小終
る物有

大坂丹波吉吉の二代目金吉衛門門人小く代師あり
此地狭細不すうれ又白の津く穢もたる上又之中の
仕立とも小吉の代不替りし一書不為系を
切しとるるに云り

小肉

和泉駿河守平國義

國義ハ百集及角野一書

寛文八年二月吉日

小も尺の代大坂の治あらん於中のたれ小て位大坂長
小はとる

城川住國廣

慶長十八月日

右ウラ
流

和泉守十道

一ウラ 寛文十一年八月吉日

系初代吉道とる百集系子は本集あも出たといつた
系といふに記さるるは此幸に足るる代はて後に出た

日月二十一年六月

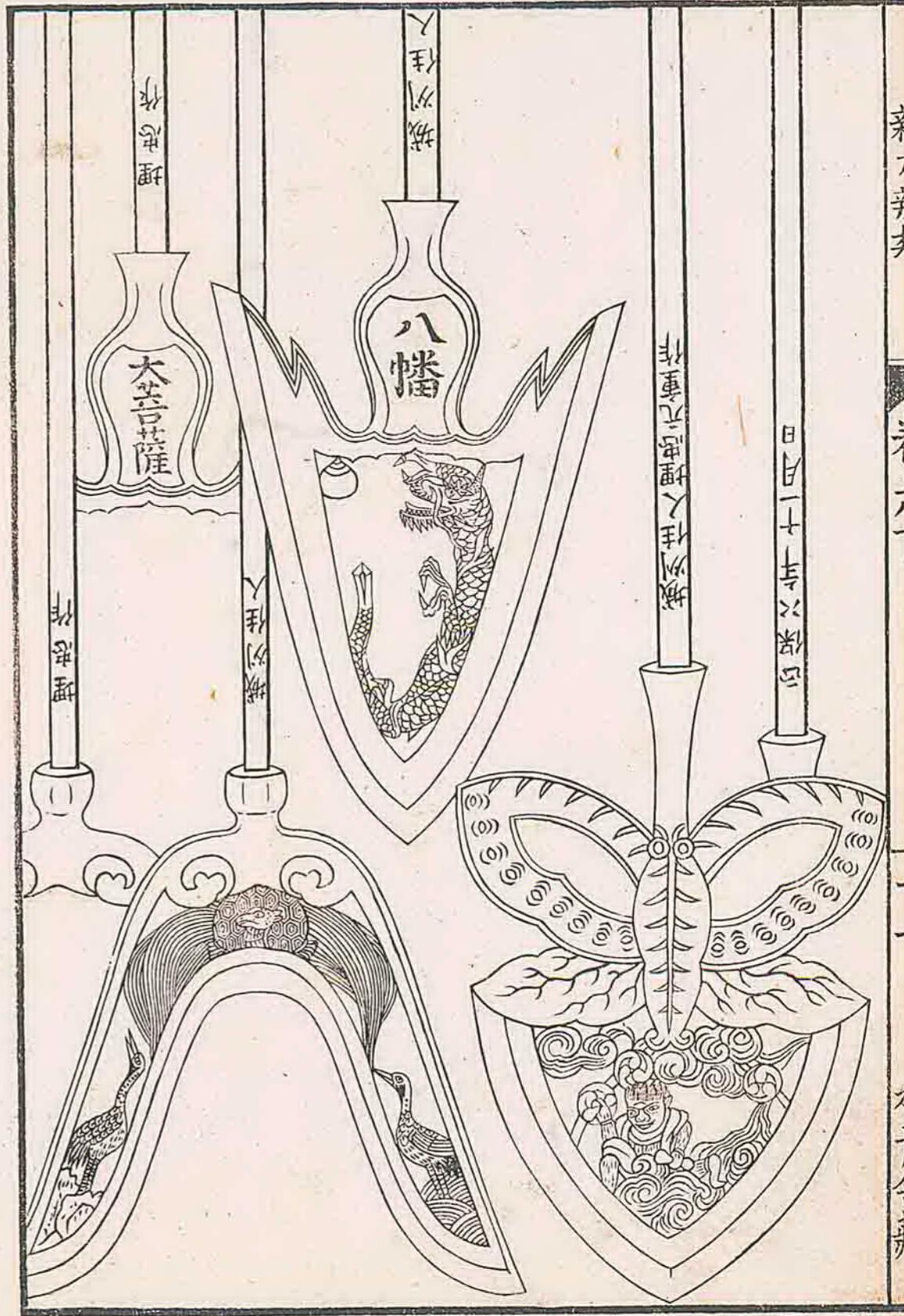
城別入埋元重作

城別入

埋忠作

埋忠作

城別入



は一本ハシ路
あり

城別入埋元重作

此五本の矢根ハ弓家

安富景山元輝翁所持

あり

日月二十一年六月

幡

いづれも透し彫り
して重なるの絵柄
残る一書ハア
なるものあり

珍らしき

出書部

図を以て

出書部

豐後守美成國

ウラ三茶堀川住人

吾一刀片平化子して地狭大辨
小龜文地刃砂流堀川國安小のりおと里ふるものこ

國安

勝れ言出事加まて出立

西面元ヤスリ大切先
長二尺五寸一分半

國安

はのこま
流もろ



近江守源久道
嫡子源金四郎

中心ノム子ニ

金四郎 生年未ハ山業ニテ作之

運者有天 善戦者不死

元禄二年八月吉日 久道六拾四歳ニテ造之

小肉

信濃大掾藤原忠國

二代目

刃方九シ

因幡國之先尤大國也其子孫後及集花子予も亦に出立とい
つとて未だ家系成詳不せ凡は此のり人蓮花吉の承流乃
正を石を以て尺れを元祖忠國と云は勝國と銘一系出
羽大掾國治門人とあり又刻國と改寛永九申年因幡國
多取のり忠國と改同十一年ハ有信濃大掾不文殿を山本
ハ郎右衛門といふ寛文六年迄存る故之友に由て此れ中心
ハ二代目不しく又山本ハ信長支と云地狭能志あり復理ハ
三系のぬく勝也とる出立事あり寛永七年輕解信仗
のりさるる薙刀太刀を能る言保五年迄存命あり薙
刀二尺中心二尺太刀之尺八寸ハツ尺

信濃大掾藤原忠國

刃方九シ

三代目も山本ハ
信濃大掾と云父祖
小方ね上上云

忠國

四代目も山本ハ信濃大掾
と云初ハ信濃大掾
と切を身二字認
今六十餘年之代
上云と云云

丸ム子

因幡息取住藤原魚先

三代目

魚先の先祖ハ日
並伊助と云關の

魚元ウツ人ともある天正の比侍あり信を認切らば云二代目ハ
侍前出生日並越吾郎と云魚先と認を二代目不著吾郎云
我ら海之慶長の比と云侍あり此未見之代目ハ日並宗
十郎之世に初代の魚先といふ御宗ハは宗十郎あり

マルム子

因列住魚次作

四代目ハ因幡出
生云日並吾郎
吾郎と云云

あこ年より里に魚次と認を初ハ魚先と切らばや後集のれら
右衛門と云は兵右衛門と云也

丸ム子セシメ

因州住三郎先

刃方面トル

小島文小しと地漢強く上云

小肉

因州住藤原魚先

六代目ハ今の治上にして上云也延享二年宗云有せり
日並改く者掛並船と云

因幡國住藤原兼光

兼光の
子孫助
兼光

作兵助小同「小肉セシメタツ」ありよ出因幡國者系兼光ハカクカク弟子之治と云々

因幡國鳥取工濱部壽格

天明四甲辰歲二月日於
武蔵國江戸鍛

因州蓮花寺承欽ハ予ハ相劔の門人也其國工濱部格
左衛門代ハ鍛冶を業として其師を承継りて其師の
江府より出川ハ承継りて其師を承継りて其師の

以て予ハ承継りて其師を承継りて其師の
駿あり又味強ク地狭弱リ帽より其師を承継りて其師の
初ハ其師の承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の
又壽格ハ其師の承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の
年終りて其師の承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の
真平真佐真藏あり

列山形家士山口昆右衛門重行

ウラ天明三年二月日

重行ハ正秀
の人も此條
米澤任正通

同不吉山子英代山形任正秀ハ仙臺任國色ハ其師を承継りて其師の
位のりのも也○近世ハ其師を承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の
ハ其師を承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の
小弱徒のみ好む人多キ故其師を承継りて其師の承継りて其師の承継りて其師の

○奥列會洋住長信

長信ハ其集
及角野々書
不も尺らむ

其出来系二代目如相大振國返る為又よ似て地狭潤以を
と弱きことあり信也其系に因一

角ム子

○米澤住高廣

信々く地狭細小自ひ有て系系くる田の如く上と

カシム子

○常列水久住坂東太郎鎮正八道十傳

其集に出る如し此流と種々する如く不出と

○獲

小肉

ウラ

○矢田作十郎源助心非就劔

尾張國名護屋の相劔家矢田作十郎なる者あり
六十餘歳なるべし此非就劔其人の佩るあらん
此流の作劔刀をアムにさの上とハ見らむ加卜おの風情を
のみ好高に鷹も知るべし

マルム子

○大和守安次

經理又強く見
るありお徳同
人ありや

ウラ金象眼ニテ

山野嘉衛門永久判
參ッ胴截断

寛文二年霜月十三日

新編
武家
系圖

卷六下

十一

水鏡

○武刃住 安英
安貞

ウラ以南蠻鐵真上
鍛作之
武藏太郎安國の親

煉於八幡燈
淬於瓜割泉

三郎兵衛光三造

ウラ ○安永八年冬廣

光正ハ名棟國小濱の治工也國物惣先と同位

藝州住源國佐

國佐ハ常陸
國ノ戸小佐

則房の門人の名潮と云廣島に住
此ノ保手留の工にして大解の上也小龜又多し

角ム子

○紀伊國藤原友道

其集來の由
之國重行乃
如きもの也

上佐住上野大掾藤原久國

ウラ 享保十三甲午二月吉月

久國ハ上野大掾
國益う子小佐系
金四郎久造の門
人也其集來

角ム子

肥後守藤原輝廣

刃長一尺七寸五分

角ム子

肥後守輝廣

異銘ありしもの
後に由り

新編

卷六下

十一

水鏡

新編 卷六下 十一

角ム子

長州住藤原清重

物も他形も其の古小者もつぎにあつては程業を勵まむべし
後乾子のついで

「フモテ」天下 ○泰平國士安人 直信重代



山城守藤原國宗作

細慢理

越前の國清國宗とも銘せしや中心作位も今く同じ又國
清山城大掾と切しつあや

小肉アリ

忠重の忠重の弟子あつらんかあつるといふは
よく似たあり

薩門住忠金

「ウラ

延喜七年八月日

角ム子メントリ

備前長船住

七兵衛尉
源光衛門尉

祐定作

此三人ハ永正祐定の三代の末まで寛永
よりいふ治寛文は其工也上

八幡大菩薩

末世劔子孫寶

周防長門の二王位あつたりし
あつんそ出来備前清光祐定
ホのこせし

備前國住二王清重

横刀住國平

「ウラ」 延喜七年二月日

其及の八川崎の住無湯長船の所を國とる如し

新編

卷六下

十一

水音舎藏

新刊辨疑 卷六下 十一

南中國水田侯天々國重作

九ム子

和泉守子本院盛國作

薩摩平國住國平作

國重作國平作
工中ハ續々ニ終部
ニ申出ス

小肉

武列住藤原重信

奥州振あの重信亦武州より又別人ありや詳あはれ申出
美州の冬屋小似て美味終小島文と書集一書も申出

カクム子

越中守包國

カクム子
カサ子アツシ

包國の中心支集の銘正し〜〜〜故不交不國也

德永式部卿法印壽昌
嫡流藤原昌常慰鍛之

德永氏の作

カクム子
ヒラセシメ

ウラ 天明四甲辰年二月日 地味出本在
に正秀不似て後理其ものをより〜〜〜せん

於東武 奥列住人藤原国包作之

今の國包ハ

人ハ〜〜〜海も亦同〜〜〜理のそはハ又味終もあて今の
海治より〜〜〜統のりはら又味河〜〜〜と志る〜〜〜あり

藝列住藤原廣隆作

新刊辨疑

卷六下

十一

大正四年

右ノ字槍の中心也は廣隆ハ元祖ノ子孫賜ト云初代
の出羽大探國路園傳也也似ナリ上ノ字ナリ

「カクム子

奥加任安倫

あ倫ハ志系前ノ記モ他ノ評ハ前集ニ詳也銘中心部ノめき

小肉アリ

長曾孫虎徹入道興重

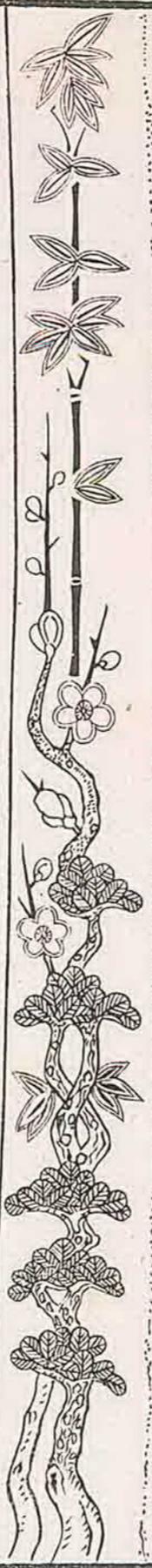
丸ノ子

是虎徹壯年ノ他也出草モ此大銘有るに後

小笠原庄入道

才口ニ鉄以三十斤鍛

「長旨作 廻」も京井上氏忠辰



「小肉

一竿子の面彫繕造たる故重出也

越前守助廣

長二尺二寸八分餘 龜文

寛文六年二月吉日

寛文六年ハ國邊なる如し同七年二月と切ハ津田被ある物廣
 少切を鑿能抽出し國邊の鑿不同し同八年以後の鑿を
 ハたよ出た處他の鑿也極そ中心は双方九きた出来物也

津田被刃守助廣
 延寶三の二月日

刃方九ク面取

長二尺四寸一分濤瀾龜文

中心先
面取

井上真政
 延寶三の二月日

寶曆年中系師に在し何丹波國の嘉慶也此に生政と
 助廣や此處他をよきと比せば仕して急あらず往て見
 り何しと比す後遂小關東に來る天明二年此初冬刀商

鑿能新六の形者一刀被携りあり中心を包多鑿之を
 乞是を見はる事被磨る破靴不入研ハおれ人為能目
 録る意と記能工鑿研ありて急務志録事に是或ハ地ある
 の如き抄請を先出鑿也能不見留志むれを先録ハ村書
 忠賜廣ある人志能録能直家上の出来あらんといふ事
 是を能る事んあらん地録する事也や剛潤大鑿小鑿
 録録として自能録する事也能る事也山の如く
 文大夫よりむ山あらん地録する事也玉を一つ録める如く寛文の
 末迄寶の初此能録廣家の逸文子能る事也二人の
 見能る事也即ち刀鑿を能る事也此處他也三十の事
 已不此能の刀ある事也今初て見能る事也能る事也
 能る事也研阿内海依者能る事也能る事也能る事也

然も何れも文鏡の事あり終る新器をばき形し是味も
 傑の作者を以てあり一日門人問て曰先生此刀に遇りて
 に相剣は感名や相相絶り於多事其改の上も助廣を以て
 一純心ては直化津田の表不認し井上學名に認ぎてを觀る
 先生の相お於新器ある事予を曰然らば此一刀ハ位
 列能出る事あり是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
 是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ是れ
 何れも下儀ありんは直化のみにあつては他も亦是
 あり難しつ人解し多退く

新刀辨疑六下終

家君弟に弟子小教て曰新刀をおせんる古刀
 是則や未あぶし今能お習古刀ハ天國宗近を替く
 是先傳あり栗田口也相新刀ハ助廣故弟一と一多
 志を以て今も次出新物ハ其改國廣ホの數二あり
 ○門人問曰薩摩の正房お負を其改目標と云説を
 本より信せば其いり先生は評をすんお君答曰
 此説ゆ廣く其改に及るはといふお似たりお法未
 熟の言もあはれし○一人曰曰小林國輝數代ありてや
 對て曰お負を以て事即ち其々浪華不捨て居
 を能るも其末也刀叙不る事ハ集進一人而已也
 末も故拳は拜急元志津量氏長曾孫ホの嫡流也
 是刀を流し又於ホ其則が末も國其あはれ也

浪華と比ふ不亦在岩城浪木ハ二代刀劔を海に流
 華鈴木ハ小刀成化朝のこころの類ハ國々少々
 有り取而も唯刀劔不在○同上化毛打卸也又
 の御り甚く強く却て切を研製度乃至多漸く切
 出るやい少況も然るも者や答曰子の級終物
 不始より切ぎ軽ハあし是研を知らざる者の言
 那輕ぶし ○又問を者し今從て造輕物無所打
 又も土増打して造我出るもや答曰是痛を瘡
 志て廢人やあるが如し剛強ハ淨は種よ記物を何
 哉よ海輕くものあらんや○一人曰は比羅波の友よ
 其書を贈る席徹お愛其及ハ真の化不て世に多
 う〜び〜も入るの難むは故也又定まると云又系

浪治ハ系人が能見大坂浪治ハ大坂人が能見江戸
 加治ハ江戸人が能見るを謂者ると云希ハ先生
 の評を待多是も答む家也曰予東武小下りて
 予り日に數刀成見輕る系少増れ其是故了
 此三子を見るも亦少の如く業無増るを
 在連せり況や其國工ハ其の國人が知輕と其説
 於多おや○又曰浪華に銘六と云者其濼一連
 して新刀の銘多く其は銘六切輕別ち家も其
 寫しを其いふは其者や答曰銘六ハ楊弓少ハ其
 と云其物仕めて世に是を銘六を呼打此物
 なるに銘六ハ自ら銘六也又次郎其濼孫其
 ハ其濼小其濼三其濼其濼と云七ハ人其濼六

澗やう同く新打は臨切也其比東河子毛系あ城夷
 川住長吉と云存物海流も其是毛依名ハ六兵衛と云
 是木の鞘と室町の比より諸國往々し水をといてを
 詳不^{つまひら}あ鞘に及もは唯刀細ハ諸國の要意たる事
 を旨^{むね}やとて事澄定する時を存の教づるにせし
 神^{かみ}は如しや鞘の刀教裁もつて一可^か否^ひを示
 来^き交^く不^ふ於^お多^た諸^{しよ}子^こ候^{こう}んて曰^い小子^{こし}亦^{また}勞^{らう}あ^あし
 比^ひに^に至^{いた}る^る事^事皆^{みな}先生^{せんせい}の力^{ちから}也^{なり}と云^い後^{のち}追^お加^か事^{こと}終^{つひ}
 於^お多^た御^ご事^じ記^きし^しを^を附^つあ
 乙^{おつ}甲^か辰^{ちん}年^{ねん}亥^{がい}二^に月^{げつ}
 男^{おとこ} 總^{そう}田^{でん}吉^{きち}修^{しゆ}識^し

新刀辨類追加終

